

---

## 文化概念の歴史とその政治性

～社会学の視点から～

大塚 明子（文教大学）

The History of the Concept of Culture and Its Politics: From a Sociological Perspective

Meiko OTSUKA

---

本日はこのような歴史ある学会で発表の機会を与えていただきまして、どうもありがとうございます。文教大学の塚と申します。それでは今日は、主にこの Word のほうを中心に話させていたいただきたいと思いますが、適宜パワポのほうも参照させていただきたいと思います。

私は、ご紹介に与りましたとおり専門が社会学でして、社会学の中でも日本の大衆文化などを専門にしております。授業では、subculture の話、オタクとコギャルとヤンキー、漫画とか音楽について話しているので、たぶんこちらにいる先生方とだいぶ畑が違うかと思います。その意味で社会的な文化研究の専門家であるとは思いますが、ただ、やはり日頃実務的にいろいろやってる中で、文化とはそもそも何なのかといったような原理的な問題について論文を書いたり、まとまって話をしたりすることがなかなか機会がありません。ですので、今回そのような機会を与えていただいたことをありがたく思っております。なので、今日は私の発表の中にオリジナルな部分とかマテリアルがあるのではないんですが、なるべくオーソドックスに、社会学の中で文化という概念がどのように使われてきたかということに関して論点の整理をさせていただいて、後の二人の先生方の本題に続けていければいいなというふうに思っております。

それではまず、これはもう参考で、文化の辞書の定義で一応一般的な辞書と社会学事典を持ってきたんですが、割といろんなワードが使っていて、ちょっとごちゃごちゃしていて日頃の実務では使いにくいかなと思っております。なので、ここで私が今日お見せする PowerPoint は、学部生用なのでちょっと粗いのですが、イメージをつかむには分かりやすいかなと思ってお見せしたいと思います。

まず、文化、culture という概念は、英語では、自然、nature の対語というふうにいわれております。nature というのは、そのまま手が入っていないことを表すわけですが、culture は元々、牛のくびきを意味する cult という言葉から来ているようでして、人間の手が入ったものを指すのが culture の言語ということです。そして、狭い意味では、日常的によく使う意味では、例えば、手づかみで食べるよりもナイフやフォークを使うほうが文化的だね、みたいなイメージがあると思うんですが、動物とは異なる人間固有の高度な意識・行動やその産物といったような、ちょっと高級感がある使い方をされているかなと思います。しかし、高度なみたいな価値判断を含む言葉はもちろん学問の定義には使いませんので、学生には、ある社会の人々が共有する意識や行動様式の総体という、割とよく使われている一番広い意味での

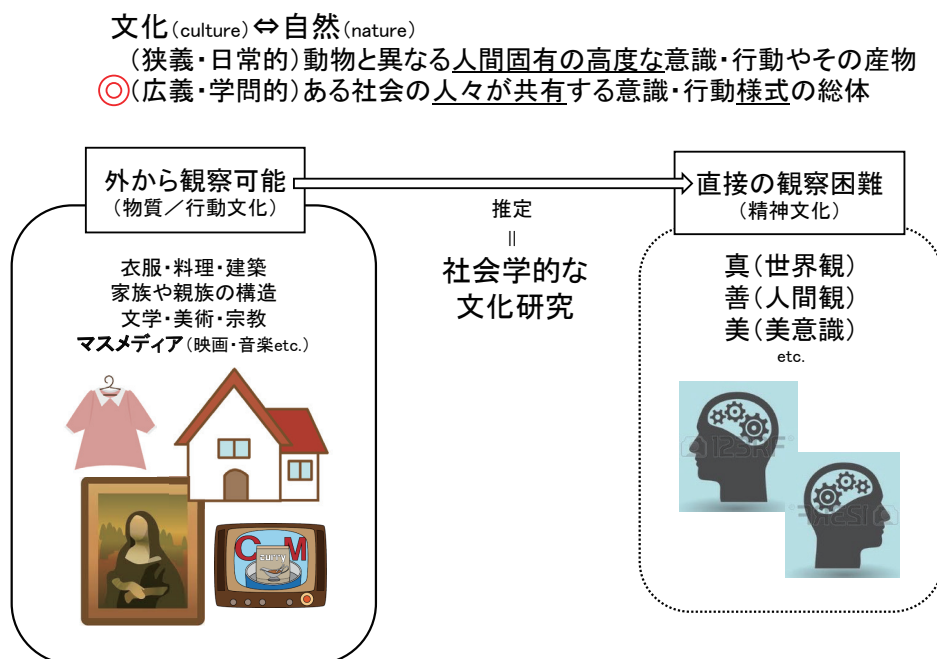
文化人類学的な文化の定義を大体示しています。ポイントはまず二つありまして、一つは共有というところ。ある社会の人々が共有してなければ文化とは言えないわけで、一人一人がやってるだけなら、それは習慣です。それから、意識・行動というところは、要は、内面的なもの、それから外面的なものも両方含むんだよというところ。書いてるんですが、これはざっくりと文化人類学では、生活みたいなワードでまとめることも多いです。

で、もう一つのポイントは様式で、パターンということです。例えば日本人全員が共有してるものであっても、1回しか起こらないような偶発的な出来事はやはり文化ではないわけ。何回も繰り返されるパターンがあるものを文化というふうには基本的には呼んでいるかと思います。そして、学部生には、そして文化の中には、外から観察可能なものと、観察が困難なものをさらに区別することができて、観察可能なものは物質の形

で表され、マテリアライズされたものと、それから、行動の形で観察できるものがある。それには、ファッションとか料理とか、あるいは親族体系とか全て入ります(図8)。社会学的な文化研究は大抵、外部から観察可能な物質とか行動文化から、できれば、直接の観察が困難な精神文化といわれるもの、いわゆるギリシアの昔からいわれる真・善・美、そのようなものを推定するのが社会学的な文化研究といえます。

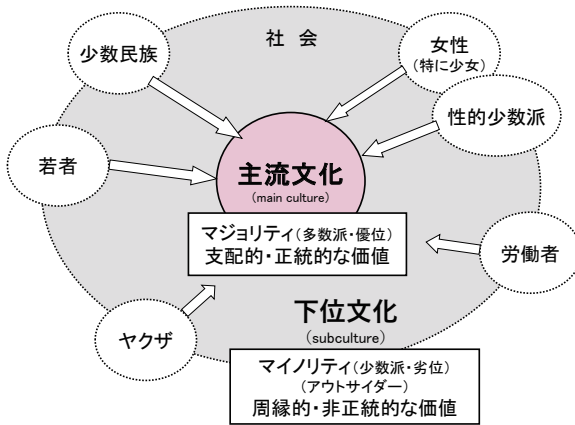
そして一つの社会の文化は共有といっても一枚岩ではなくて、マジョリティが持っている支配的・正統的な価値つまり、main culture (という言葉は日常的にはあんまり言わないんですが) すなわち主流文化であって、それに対して、マイノリティ、周縁的な位置に置かれた集団が持っている、周縁的・非正統的な価値を subculture と言って、その subculture には、若者文化とか、少数、エスニシティの文化とか、あるいは、女性は数的にはマイノリティではないわけですが、社会の中

図8 文化の概念①



で下位に置かれてきたという意味で、女性文化であるとか、あるいは、ブルーカラーの文化というものやはり欧米では subculture 研究の典型的なものとしてよく行われるものです。そして、あるいは性的マイノリティであるとか、どこの社会にも暴力団であるとかいろいろな少数派集団がいるわけですが、それらと主流文化の絡まり合いなどを研究するんだよみたいなことをイントロダクションとして始めます。

図9 文化の概念②



しかし、やはりこれは学部生向けの説明なのでちょっと端折っているところがございます、文化の概念は、厳密に考えればもうちょっと、二つ、広い意味と狭い意味しかないわけではなくって、大きく分けると四つぐらいに整理できるのではないかなというふうに思っております。A、一番広いのが今紹介したような文化人類学の定義で、ある社会集団の成員が共有する生活様式、意識・行動の総体というのを生活というふうに表してしまえば、その様式が全部文化というふうに表されることが多いです。で、文化人類学ではこのような定義でもいいんですけども、この定義の問題点は、社会と文化が同じような意味になってしまうということです。それはそれで文化人類学ではあ

まり構わないことも多いんですが、近代社会を扱う社会学ではもうちょっと区別したいなということで、もう少し狭めて、意味の体系と行為の体系、意味が文化で、外的に表された行為の体系が社会だという分け方をするところがあります。これは主に理論社会的な分け方で、実務家にはちょっと使いにくい概念でして社会的な文化研究という場合は、もう一つ狭義のCで、文化というのは、近代社会の中で経済と政治を除いた部分というようなことを実質的には指していることが多いだろうと思います。そして、経済と政治というのは権力闘争であるとか利害闘争の領域でありますので、文化というのは権力や利害とは違った、ちょっと残余的な定義なんですけど、望ましいもの、価値の体系を表しているのが文化であるというふうに言うことが多いかと思います。私も実際自分が文化研究をするときは経済的なものとか政治的なものとかは割と省略することが多いので、自分が実際に使ってる定義はこのCに当たるかなと思います。Dが、先ほど言った、ちょっと高級感ありという日常語ということです。

それでは、社会学においてこのように経済や政治と対立するものとして文化が捉えられてきた背景として、今回はイギリスの有名な文化研究者でありますウィリアムズの古典『文化と社会』という本から、大まかに文化という概念がどのように成立してきたかというお話をご紹介します。

ウィリアムズは、大体、産業革命期、18世紀の終わりから19世紀の前半に英語では幾つかの言葉が新たな意味を付与されて、非常に不可欠なキーワードとして浸透していったと述べています。五つが、一つはindustry. industryというのは、中世には勤勉という人間の特質を表す言葉であって、産業という意味合いはなかったわけです。で、現在の英語でも、industrialが産業的という形容詞ですが、それとは別に、industrious、勤勉

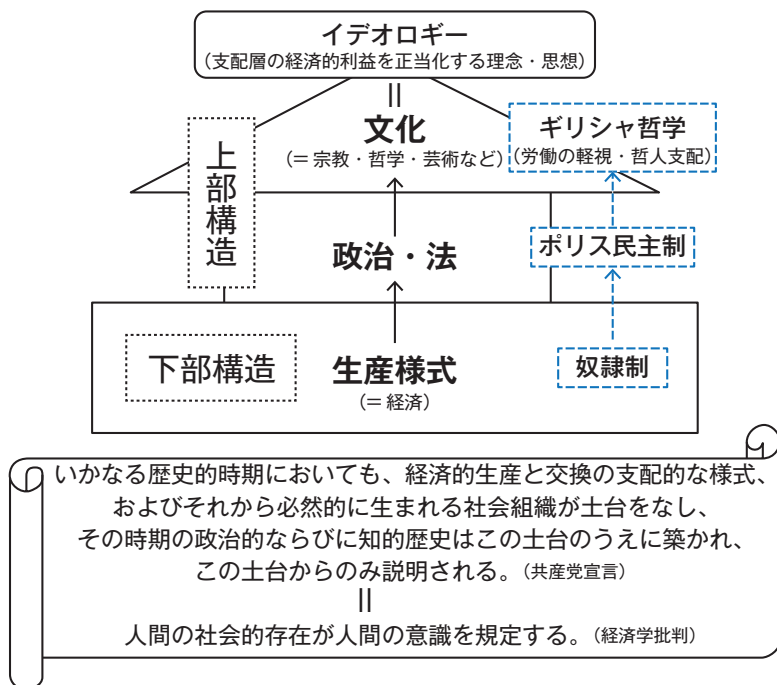
なという形容詞の形で昔の言葉が残っているわけです。しかし、そこを、そうした人間の属性を表す形容詞だったものをアダム・スミスらが生産活動一般を集散的に表す語として用い始めて、1820年代になってから、フランス革命との対比で、産業革命、industrial revolution という語が出現し、1830年代には industrialism というふうに抽象名詞化されて、すっかり産業を表す言葉に変化しました。

これと関連するものですが、class、階級です。以前は、元々 classification というのは、分類という意味が今でも英語に残っておりますけれども、元々はラテン語の意味では分類にすぎず、また学校の組を表す言葉だったのが、やはり産業革命期の1790年代から、それまでの封建的な身分よりも曖昧な、higher, middle classes, 階級という語が出現し、ちょっとずつ working class まで広がっていった階級という意味合いを持つようになったということです。

そして、やはり産業革命の辺りに democracy という言葉も、これはもちろんギリシア語からずっとあったんですけども、やはりアダム・スミスの頃に、1776年、要はアメリカの独立戦争が起こったときに新たに日常語になり始め、フランス革命後には日常的な政治的語彙の一部に組みこまれた。これは、新しい意味で使われたというよりも、浸透したということです。

そして、このような、industry, class, それから democracy と並んで、実は culture とか art という言葉もこの頃に新たな意味を付与されたというふうにウィリアムズは述べております。先ほど申し上げましたように、culture 元々は、人間の手が入った自然を表す言葉だったので、agriculture の culture ですよ、栽培という意味が強かったわけですが、中世のうちから、植物の栽培の類比から、人間の訓練という意味合いを持っていたそうです。何かを訓練するという意味で culture of something と言っていたわけですが、

図10 マルクス主義①史的唯物論



それが名詞として独立し始め、産業革命の頃に、*of something* が取れ、新たな意味が次々に付与されていきました。一つは、人間完成を最終目標とした、つまり、人間を植物のように類比して、人間が成長したり完成したりするという意味で、精神の一般的な状態もしくは習慣。これは教養という意味に近いものです。そして、その次から、全体としての社会における知的発展の一般状態とか、学芸の総体とか、最終的には文化人類学的な、物質的・知的・精神的生活の仕方全体を表すようになった。

それと並行して、特に *industry* と似たような変化パターンを取ったのが *art* という言葉だそうでした。以前は、中世までは、技能という人間の属性を、具体的な属性を指していたわけですが、19世紀に入ってから文学・音楽・映画等の諸活動を強調して表す抽象語として用いられるようになり、そのうち大文字の *Art* が、さらに抽象化されて、具体的な活動というよりは、想像的真理に至る手段、芸術と訳すのがいいと思うんですけども、強調され始め、その頃から *Artist* という存在が、特別な感受性を備えた理想化された全面的人格として表れ始めというような変化があるそうです。

それではここからもうちょっと *culture* を中心に深掘りしていきたいと思うんですが、そもそも *culture* という言葉は産業革命に対する批判の中で新たに使われ始めた用語だとウィリアムズは述べておりまして、例えばオウエンなど、もうリアルタイムで産業革命に対する批判というのは起きていたわけです。

「わたしは安く買って高く売るようにだけ訓練された合資者には全くこりごりした」。オウエンは自分が大資本家だったわけですが、このような徹頭徹尾利己的な制度の下では優れた性格など形成されそうもないと確信していると、産業革命だけ、資本主義だけでは人間が墮落してしま

うというような危機感が当初から表明されていたわけです。

この *culture* と *art* という新たな抽象語は *industrialism* の反対物を希求する中で生み出されたとウィリアムズは述べています。例えばカーライルは、われわれの時代、19世紀前半のイギリスは、あらゆる意味合いにおいて機械の時代だと。しかし、人間は機械化されてはいけなくて、あって、機械と対極的な人間の有する不滅の尊厳性を取り戻さなければいけないといったような、*industrialism* ではないものを希求しているということが見えてくるかと思います。あとも似たようなものです。アーノルドの『*Culture と anarchy*』という本の中で、現代の文明はギリシア・ローマよりはるかに機械的・外面的であり、ますますそうになっている。教養は機械的・外面的な人間と反対物としての人間の完成を目指すものであるというふうに言っております。なので、機械的な *industry* に対比された *culture* は、自然物の生長の育成という隠喩を根底に持っているわけでした。その後から、物質的文明の進歩を指す *civilization* と *culture* という言葉が対比されて使われるようになりました。

ところで機械との反対語のもう一つの具体的な意味合いなんですけれども、*culture* というのは、*industrialism* に対して連帯という意味も持たされるようになっていったわけでした。そもそも産業革命はいろんな側面があるわけですが、個人主義と強く結びついている。個人主義は資本主義の根底にあるわけですが、*culture* の概念は終始こうした思想を批判し、ある種のホーリズムですよ。一人一人の個別的な人権という話よりも、もっと社会的に共有されている価値があって、われわれはそれでつながることができるんだという発想を *culture* という言葉が表すようになっていったわけです。

ということで、ウィリアムズが以上のように

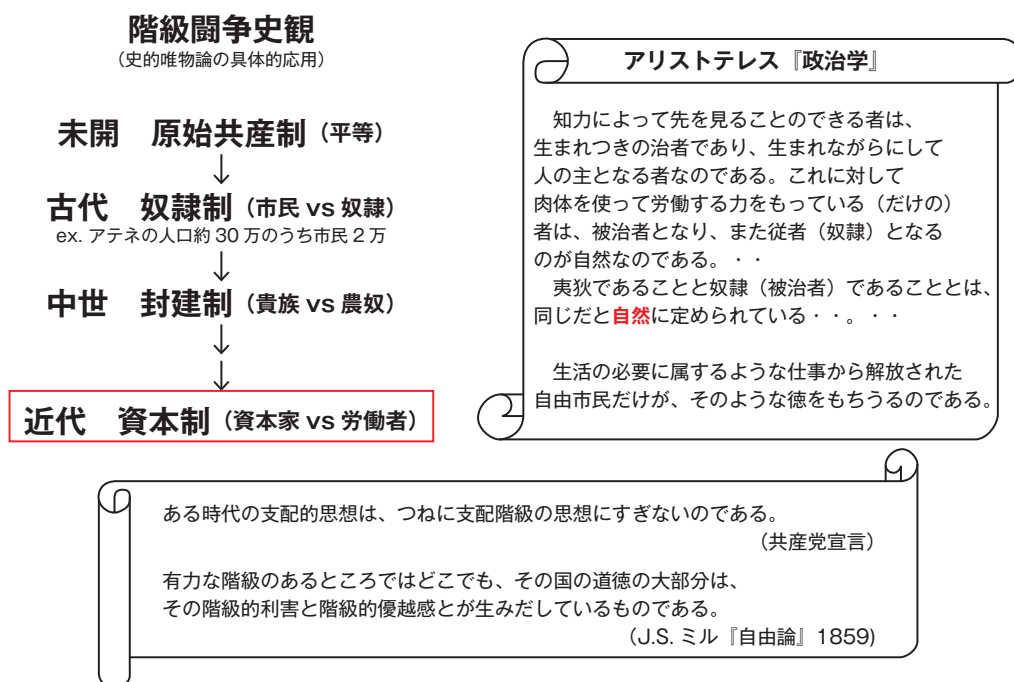


辿った対比は、つまり、industrialism が利であるのに対して、culture・art は善や美や道徳という意味合いを持たされるようになった。それから、機械に対して、有機的な成長。合理性に対して、感情も含んだ全体性を持つもの。そして、個人主義に対して、連帯。そして、物質文明が普遍的であるのに対して、culture はナショナリズムと結びついて、その社会に個別的なものと考えられるようになりましたので、普遍性に対するナショナリズムという意味合いを強くこめられるようになりました。さらに言うと、industrialism の反対を目指す主張に関しては、大まかには個人と社会の領域を分節できるわけでした、個人の領域では、culture を持った Artist が理想的な人格であるような、感情の合理性も融合したような理想的人間の成長という言葉が culture や art という言葉にこめられたわけですし、そして、社会の次元では culture はナショナリズムと結びつけられて国民国家の統合の基盤として次第に強調されてい

くようになりました。これが大体 19 世紀の終わりからだそうですが、20 世紀の初めのある評論家は、過去の偉大な文化のような真の文化は人々を統合すると、そうしたものをわれわれが必要としているような、そういったことを言うようになりました。なので、この場合、culture と art という意味はちょっとずつ変化しているんですけども、culture = art & サイエンスというようなブルジョア的な考え方では狭すぎるため、文化人類学の定義のような、生活全体への拡張がナショナリズムと結びついて要請されたと考えることができます。

ここら辺ちょっと省略するんですけども、大体 culture という概念の歴史についてここまでお話ししてきました。この culture という言葉は、もちろんマルクスによって、その人工性というか、実は経済と culture は非常に強く結びついてるんだということを 19 世紀からいわれるようになったわけです。例えば、アリストテレスの『政

図 11 マルクス主義②階級闘争史観



治学』で、知力によって先を見ることができる者は生まれつきの治者でありといったように、夷狄であること、つまり、バルバロイであることと奴隷であることは同じだと自然に定められているといったような、その社会の経済状態を反映するイデオロギーが文化であるとマルクスは述べたわけで、このように、自分の都合のいいものを自然というふうに言いくるめるような、そういう言説として文化ができていったという側面もあるということです。

マルクスはブルジョアのイデオロギーの虚偽性を告発したわけですが、ナショナリズムであれば、やはり、その民族、あるいはエスニシティの統合をつくるために文化が要請されたという側面が非常に強くあるわけでした、ナショナリズムはご存じのように、ある nation の統合・独立・発展を目指す思想でありますけれども、これがいかに人工的につくられてきたかということが社会学では一つの研究分野としてよくやられております。例えばこれは、日本のナショナリズムというのはやはり、例えば日清戦争であるとか、外に敵をつくることによってわれわれ日本人というアイデンティティができていくわけですが、日清戦争に負けた中国の側では、やはり日本と同じようにアイデンティティをまねてつくり始めて、天照大神の子孫たる日本人という家族国家観が、逆輸入というか、輸入されて、敗戦の衝撃により、黄帝の子孫たる中華民族という新概念が導入されたといったようなこともありました。

このように、民族の、あるいはナショナルのまとまりをつくるために、19世紀の後半から20世紀の前半にかけて、その民族の伝統というものがかなり人工的につくり上げられてきたということがさまざまな形で流行の研究領域になっています。その走りがイギリスのホブズボウムの『創られた伝統』という本なんですけれども、例えばよくスコットランドの伝統の例として挙げられる

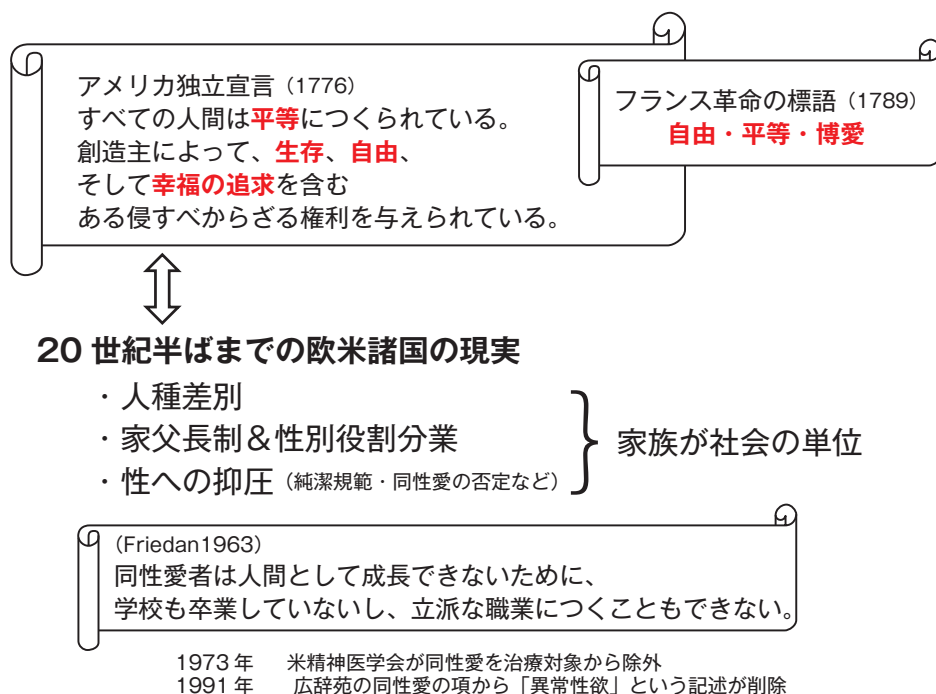
タータンチェック、あれも実はルーツを辿ってみると、伝統なんかでは全くなく、イングランドに統合された辺りからスコットランドの伝統というものがいかにつくられていったか、あるいは、イギリスの王室の伝統というものも、ヴィクトリア女王の最初の即位式はほとんど予行演習もなく、しかし、絵入り新聞ができていくに従って王室を中心としたナショナリズムがいかにつくられていったか。

結論として、ネーション、ステート、運動のイデオロギーの一部になった歴史は、実際に民衆の歴史に貯えられたものというよりも、ほとんど、もちろん全くゼロから生み出されることも難しいんですけども、ほんの小さな種から膨らまされて政治的に構成されたことがいかに多いかということです。日本における創られた伝統の典型例は特に神道関係に多いわけでした、例えば、神社で行う神前結婚式というのは一見古式豊かに見えるんですけども、あれも20世紀の初めに大正天皇の結婚式のためにキリスト教の結婚式をまねて提案されて創造されたもので、あの中には伝統的なものは実は何一つない。

それでは最後に、ちょっとだけ素人なりに問題提起を書かせていただいたんですけども、突然ですが、1970年代以降、相対主義を特徴とするポストモダンの時代の到来が喧伝されたわけですが、近代社会の平等な自由というイデオロギーは少なくとも先進国では強化され続けていると思います。

そして、そこには例えば、自他の奴隷化などの、自由を否定する自由は許されないという逆説が必ず抱え込まれるかと思います。自由が成り立つには、あるところでは自由であってはいけないということですよね。あるいは同様に、平等な自由の否定を許さないという非寛容の上でのみ、文化的多様性に対する寛容は成立するのではないかと思います。例えば、日本でフィリピンのようにムス

図 12 自由と平等という理想



リムに限って一夫多妻制を法制化するようなことができるかどうか、もちろん憲法上できないんですけど、憲法を改正して文化的多様性を認めるといことができるかどうか、と疑問に思ったりもします。

根本的な近代社会の価値観としての、自由な、平等な自由という価値観、そこまで及ぶような文化的多様性を許すということは、やはり社会の根幹が揺らぐことであって、文化的多様性の尊重は、近代の根幹的価値に関わらない、周辺的と言って

いいのか、料理などの物質文化を中核とする形にならざるを得ないのではないかと、文化的多様性を言う場合にも、文化の中でどの水準について取り上げるのかということに関して考えてみたほうがいいのかなというふうに素人ながらに考えております。

いただいた時間をちょっと過ぎてしまったんですが、発表を終わらせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。